

大阪府立成人病センター・大阪がん予防検診センター 東日本大震災における 大阪府CT検診車による医療支援

編集委員 羽田野 顕治



大阪府立成人病センター 外観



2011年3月11日に発生した東日本大震災では、特に津波による被害が大きく、海岸近くの医療施設は壊滅的な打撃を受けました。被災地に向けて、さまざまな医療支援がされるなかで、大阪府のCT検診車(日立メディコ製 ROBUSTO®搭載)が岩手県陸前高田市の避難所となった高田第一中学校に派遣されました。大阪府がCT検診車を4月から5月末日まで岩手県に貸し出し、その運用を現地の医療スタッフがを行い、CT撮影を行いました。CT検診車の派遣にあたり、岩手県知事から派遣依頼があり大阪府健康医療部健康づくり課が調整を行い、地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪府立成人病センター 放射線診断科 中西 医師、米田 技師、財団法人 大阪府保健医療財団 大阪がん予防検診センター 久保 技師と2名の運転手が現地まで行き、CT検診車の取り扱いやCT操作の説明をしました。この医療支援の経緯をまとめた本ルポが、今後の災害時の医療支援の参考になれば幸いです。

○CT検診車の派遣について、知らせてくださった大阪府立成人病センター 中山先生にお話を伺いました。

羽田野：先生は、日本CT検診学会のお立場でCT検診車派遣

のサポートをされたと同いしましたが、大阪府のCT検診車が医療支援に出動に至った経緯をお聞かせください。

中山医師：震災直後の日曜日、仙台市内の病院から停電で画像診断ができないのでCT検診車を送って欲しいという依頼がありました。私は大阪府と日本CT検診学会の理事会に連絡し、大阪府をはじめ3台の検診車が派遣の準備に移りました。結局、仙台市内の電力が速やかに復旧したためこの話は立ち消えになりましたが、CT検診学会からCT検診車派遣の情報の取りまとめを命じられて、情報を収集し伝達するコーディネーターの役割を果たすことになりました。関連学会のメーリングリストにCT検診車の派遣が可能と流したり、神戸の震災時に活躍された放医研OBの松本徹先生から教えていただいた実務的条件を整理したり、政治家の方ともコンタクトをとりました。しかし具体的な要請のないまま10日程経ったところで、当センターの中西先生から突然連絡をいただき、中西先生が、岩手医大の放射線科の知人にメールで検診車の派遣を提案したところ、派遣を要請されたとお聞きしました。その方が岩手県の災害対策本部兼務だったことに加え、関西広域連合の災害支援の中で大阪府と岩手県がペアになったこともあり、話はとんとん拍子に進みました。人を集め、燃料を

積んで、さあ行ってらっしゃいというわけにいかないの、ルート、補給、宿舎をどうするかなど、ロジスティックの部分を岩手県庁と大阪府庁の間でつめてもらわないといけなかったのですが、本当にスムーズにできました。その背景には、大阪府がこのCT検診車を購入する理由として、府民に質の高い検診を提供することとともに、災害時に派遣して医療支援をすることをあげていましたので、府庁は積極かつ柔軟に動いてくれました。大阪がん予防検診センターとの連携という意味では、大阪がん予防検診センター 黒田所長が今回の派遣に積極的でしたし、成人病センターのOBであったことも大きかったと思います。

羽田野：今回の被災地へのCT検診車派遣の経験から感じられたこと、またこれから必要なことは何でしょうか。

中山医師：赤十字や災害医療の関係者に、現場で使用できるCT検診車の存在がほとんど知られていないということが問題です。また、いざというとき必要なものに対してこれはこの学会が支援するとか、どこへ要請するとかなど、災害時の医療支援体制について整備が必要だと感じました。

○次に実際に現地へ行かれた大阪府立成人病センター 中西先生にお話を伺いました。

羽田野：はじめに、大阪府立成人病センターの役割を教えてください。

中西医師：府立病院機構のなかで、中心的な役割の病院です。大阪大学の重要な関連病院という立場であることは間違

いありません。患者さんのほとんどが悪性腫瘍であり、がんセンターとは呼びませんが、私個人としては西日本のがんセンターというつもりで勤務しています。

羽田野：今回、先生が医療支援に出動されるきっかけは何だったのでしょか。

中西医師：東日本大震災が起こっても、こちらの専門はがんなので疾患的には直接関係がありません。どうやって被災者のお役に立とうか考えた時に、阪神・淡路大震災の当時、放医研チームのCT検診車が来てくれたことを思い出しました。購入時に成人病センターが関わったCT検診車が、道をはさんだ向こう側の大阪がん予防検診センターにあり、がん予防検診センターの方も同じように動員命令があるかもしれないということで準備していたので、医療支援の意見が一致しました。また、私自身が岩手医科大学の放射線科の江原教授を、専門の骨軟部画像診断の関係で存じていましたので、お見舞いメールを出して、お役に立てないかと申し出たところ陸前高田市に来てほしいとの具体的な要望をいただいたものから、何とか実現に向けて話を進めようと思いました。

羽田野：話を進める上で、問題になったことはありますか。

中西医師：大阪府がん予防検診センターのCT検診車を出動させるのに、大阪府立成人病センターから人が出てサポートする必要性について、一部から疑問の声が上がりましたが、医療支援にあたっては、検診ではなく病院で診療している医師と技師が行って技術的サポートをしなければ負傷者や脳梗塞の患者の診断はできないと言って説得しました。その他の準備は、話が正式に決まってからは事務局が手際よくやって



大阪府立成人病センター 中山富雄 先生



大阪府立成人病センター 中西克之 先生



大阪府立成人病センター ロビー



被災地の状況



避難所の伝言板



高田第一中学校避難所案内図(3月30日)

くれて、問題ありませんでした。

羽田野：実際はどのような手段で現地に入ったのでしょうか。

中西医師：私と米田 技師は、秋田空港からバスで3月30日に盛岡に入って、対策本部の担当者と打合せをし、CT検診車は日本海側を經由して31日に現地で合流しました。

羽田野：現地はどのような状況だったのでしょうか。

中西医師：岩手医大では、CT検診車の話が順調に進んだのですが、現地ではCT検診車が来ることをはっきり聞いていなかったような印象でした。陸前高田市は盛岡市内から3～4時間かかりますので、情報がうまく伝わらないのかもしれませんが。

羽田野：今回、実際に被災地支援に行かれた後の感想はいかがですか。

中西医師：今回はイスラエル軍の医療部隊がいろいろな設備を作っていましたが、医者が身一つで救援に行っても、胸の写真を撮ったり、血液検査ができないと診断が進みません。病院の放射線部門や中央検査部門が、プレハブを建てて簡単な検査ができるような準備をしておくことも、災害に対しては必要だと感じました。

○CT検診車を運用している大阪がん予防検診センターの皆様にお話を伺いました。

羽田野：大阪がん予防検診センターの役割を教えてください。

山本技師長：当センターの設立の経緯は、大阪府立成人病センター集検2部が前身で、老人保健法の施行に伴い、大阪府のがん死亡率を下げることを目的として、昭和62年に開所さ

れました。当初は胃がん検診だけでしたが、その後大腸がん検診が始まり、平成17年(2005年)にCT検診車も導入されました。現在、検診車は胃がん検診用は5台、マンモグラフィー車2台、胸部単純撮影車が1台、CT検診車が1台、婦人科(子宮がん)検診車が1台あります。大阪府下80%の市町村の住民検診や職域の検診および個人のがん検診を実施していますが、がん検診に加えて総合健診も大きな事業の柱になっています。

羽田野：胸部CT検診については、年間何件くらい実施していますか。

山本技師長：肺がんのCT検診は、年間1,500～2,000件を実施しています。また、大阪府のアスベスト検診を委託されて検査しています。

羽田野：大阪府立成人病センターとは、どのような関係でしょうか。

山本技師長：当センターの前身が、成人病センターから分離したこともあり、がんにおける精度管理では、密接に連携を取っています。また、当センターで発見されたがんの治療機関として、成人病センターに紹介する等、協力体制にあります。

羽田野：被災地の陸前高田市への出動にあたってどのような準備をされたのでしょうか。

久保技師：医療支援に行くにあたって、CT装置について病院で使用する診断用の撮影プロトコルを登録しました。私は日常業務で検診の撮影をしていますので、診断用の撮影プロトコルについて、大阪府立成人病センターの米田技師が内容を確認しました。現地で応援に来られた岩手県の技師の方た



大阪がん予防検診センター 外観



CT検診車



CT検診車へ給油



大阪がん予防検診センター 受付



検診車内のCT ROBUSTO



CTの操作確認

ちへの説明は、私と米田技師が行いました。また、テレビ等の情報から、水や食料が容易に手に入らないとわかっていたので、カップラーメンと飲料水は大量に積んで行きました。

羽田野：新年度の4月には大阪がん予防検診センターに検診の予約が多く入っていたと思いますが、どう対応されたのでしょうか。

箕原主任：4～6月の検診の予約に関しては9月以降に延期させていただき、各市町村の検診担当者の所にご挨拶に行きました。岩手県陸前高田市へ災害支援ということで気持ちよく協力していただきました。

羽田野：被災地へ行ってみて、困ったことは何ですか。

久保技師：水が出ないのが困りました。水で手が洗えない、何をしても水がないわけで、ペットボトルの水で洗うしかないのです。3日位いると手が黒くなってきます。車両の周りを触るのでバシャバシャ洗いたい気分になりました。あの地域は今も水が出ないと思います。

羽田野：被災地陸前高田市で、CT検診車の引き取りは実際いつごろだったのでしょうか。

山本技師長：三浦技師、箕原運転手、石田運転手の3人でCT検診車の引き取りに出張し、6月3日に現地の医療スタッフの方々と引き継ぎをしました。

箕原主任：5月の末までの貸借の契約だったのですが、検診予定の都合で6月3日に受け取り、4日に大阪に戻って来ました。

三浦主査：CT検診車の引き取りのため、花巻空港に飛んで北上市に前泊しましたが、被災地という感じはありませんでした。翌日、陸前高田市にレンタカーで向かったのですが、景色のいい山道を川沿いに行く途中で道を曲がった瞬間に、がれきの風景に変わったのです。津波の被害のすごさを痛感しました。

箕原主任：私たちは6月の状況しか見ていませんが、3月と6月に両方行った運転手の話では、3月はもっとひどかったとのことです。

羽田野：現地におけるCT検査の撮影件数は、どのくらいだったのでしょうか。

山本技師長：全部で13件です。4月が11件、5月は2件です。部位は、頭部4件、胸部6件、胸部-骨盤が2件、右足が1件です。

羽田野：今回の大震災の医療支援でわかったことは何でしょうか。

久保技師：現地の医療スタッフの話では、救急病院に30分で搬送できるという場所にCT検診車を運んで行ったので、救急患者については、診断ができて治療もできる場所に運んだ方がよいとのことでした。CT車で診断がついても、ここでは治療ができないので搬送した方が早いという判断です。そういう意味では、CT車単独の支援の難しさを感じました。

三浦主査：実際、診断して治療という一連の流れのなかであればもっと活用されたかもしれませんが、今回、人数の多い少ないに関わらず、1人でも2人でも撮影して、少しでも役に立ったということはよかったと思います。何十人も撮影しなければならぬ状況がなかったというのは、患者さんが少なかったということで、それはそれでよかったのではないかと、みんなで話しています。

今回は、東日本大震災の被災地の一つである岩手県陸前高田市の避難所の高田第一中学校へ、大阪府立成人病センター・大阪がん予防検診センターの医療スタッフの皆様がCT検診車を派遣し、奮闘された状況のお話を伺いました。被災地の報道では、まだまだ復旧には程遠い不便な生活を続けている多くの方々がおられます。一日でも早い安らぎのある生活が被災された方々に戻ることを祈ります。

今回の訪問に際し、長時間にわたり、ご協力いただきました大阪府立成人病センターの中山先生、中西先生、大阪がん予防検診センターの山本技師長、久保技師、箕原主任、三浦主査に深く感謝申し上げます。大阪府立成人病センター・大阪がん予防検診センターと皆様のますますのご発展を祈念しております。

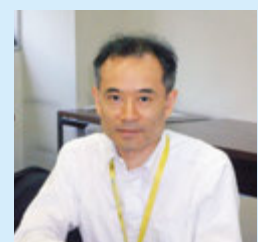
※ ROBUSTOは株式会社日立メディコの登録商標です。



検診車内の操作室



財団法人 大阪府保健医療財団
大阪がん予防検診センター
箕原英 主任 | 久保文裕 技師
山本兼右 技師長 | 三浦一利 主査



筆者